

場所から考える高齢者の地域居住

第3回 地域に住み慣れること:「ディスカバー千里」の試みから

Ibasho Japan 代表/千里ニュータウン研究・情報センター 事務局長

田中 康裕

1 地域に住み慣れること

大阪府の千里ニュータウンは、1962年にまち開きした日本で最初の大規模ニュータウンであり、この後、各地に数多くのニュータウンが建設されていった。人工的に開発され、歴史のない街だと指摘されることもあるニュータウンにおいて、人々はどのように暮らしてきたのか。まち開き当初、千里ニュータウンの府営新千里東住宅(写真1)に入居した人々から伺ったいくつかの話を紹介したい^{[1])}。

まち開き当初は「竹藪を切ったばかりという感じ」で、まだ道路も舗装されておらず、雨の日は長靴を履いてぬかるんだ道をバス停まで歩いたということである。ある人は「ほんとは大変なところへ引っ越してきたと

思った」と話す。団地は「田舎の家と比べたら箱」のようだったが、今では慣れてしまったと話す人もいる。

現在、府営新千里東住宅は建替えが進められている(写真2)。建替えにより中層5階建の階段室型の住棟が、高層13階建の廊下型の住棟になる(図1)。建替え前の住棟における階段室は自治会の最小単位で、まるで「縦の長屋」のように近所づきあいも盛んだった。建替え後も同じ階段室の人と近くの住戸に転居したいが、抽選のためバラバラになってしまう。階段室型の住棟では、玄関が向かい合っているため「お茶飲みにおいで」、「何か買いに行くんやったら言って」と声をかけ合ったり、ポストに新聞などが溜まっているのに気づいたりしやすいが、廊下型の住棟ではそれも難しくなる。「エレベーターになったらどういってお付き合いになるかが問題」だと不安を口にする人もいる。

地域居住(エイジング・イン・プレイス)は「住み慣れた地域でその人らしく最期まで」というスローガンで表されるものである(松岡,

2011)。このスローガンに表された「住み慣れた地域」の部分について、ここで紹介した話からは2つのことが浮かびあがってくる。

1つは、まち開き当初に千里ニュータウンに入居した人々にとって、そこは今まで住んだことのない環境であった。しかし、年月をかけて人々はその環境に住み慣れてきたことである。もう1つは、集合住宅の建替えのように環境が大きく変化する場合、たとえ同じ地域に住み続けていたとしても、住み慣れた状態ではなくなってしまうことである。このように、住み慣れるとは、人と環境との関係の変化として実現される状態である。

この連載では、大阪府・千里ニュータウンの「ひがしまち街角広場」に注目してきた(田中, 2018, 2019)。今回は「ひがしまち街角広場」から生まれた活動であり、筆者が参加する「ディスカバー千里」(正式名称:千里ニュータウン研究・情報センター)を通して、住み慣れることのサポートはどのように可能かを考えてみたい。ディスカバー(Discover)とは



写真1 府営新千里東住宅



写真2 高層棟への建替えが進む府営新千里東住宅

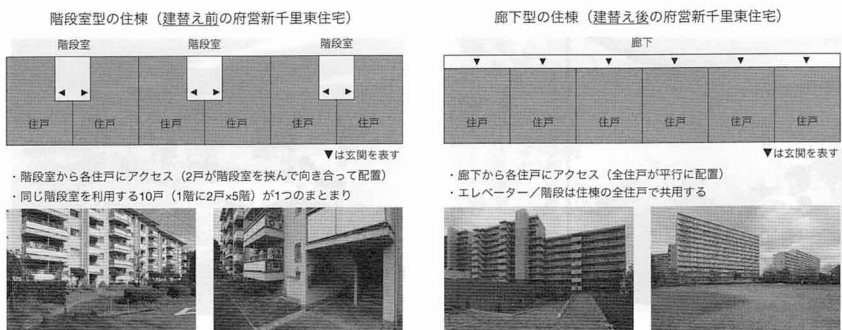


図1 階段室型の住棟・廊下型の住棟

「発見する」の意味で、「ディスカバー千里」は千里ニュータウンの歴史や魅力の発見を目的とする活動である。

2 ニュータウンの 絵葉書作りから歴史へ

2002年7月、「ディスカバー千里」の前身となる「千里グッズの会」が、「ひがしまち街角広場」で最初の集まりを開いた。「千里グッズの会」は「ひがしまち街角広場」で出会った地域住民、建築・都市計画の専門家、大阪大学建築・都市計画論領域の教員・学生が立ちあげたグループである。

千里ニュータウンの絵葉書

「千里グッズの会」は、「千里ニュータウンにはお土産がない」、「魅力ある街には魅力的な絵はがきがある」というアイデアから、千里ニュータウンの風景写真や調査結果などを素材とした絵葉書作りをスタートさせ、「ひがしまち街角広場」やイベント会場での販売を始めた(写真3)。

「千里グッズの会」が活動を始めた2002年は、千里ニュータウンまち開きの40年目にあたる。当時、千里ニュータウンでは集合住宅の建替えを中心とする再開発が始まり、風景が大きく変わりつつあった。

筆者も2004年4月に「千里グッズの会」に参加して以来、絵葉書の素材とするため千里ニュータウンの写真

を撮り歩くようになった。当初は、桜や紅葉など季節ごとの風景を撮影していたが、大きく風景が変化していくのを目の当たりにし、再開発前の風景も意識的に写真に撮影するようになった。結果として、「千里グッズの会」のメンバーが絵葉書のために撮影した写真は、再開発前の風景の記録になったのである(図2)。

千里ニュータウン展

まち開きから40年が経過した千里ニュータウンで生まれたもう一つの重要な動きは、千里ニュータウン自体の歴史に対する関心の芽生えである。

2006年4月22日から6月4日まで、吹田市立博物館で春季特別展「千里ニュータウン展-ひと・まち・くらし-」が開かれた。この特別展では千里ニュータウンの計画理念、団地での暮らし、住民活動など、千里ニュータウン自体の歴史が博物館の展示対象になった。このことは、歴史のない街だと指摘されることもある

ニュータウンにおいて非常に大きな意味をもつ。特別展は、市民実行委員会の参加により企画・運営されたもので、「千里グッズの会」の何人も市民実行委員として参加している。

特別展が好評であったことを受け、「千里グッズの会」のメンバーが中心となって新たな市民実行委員会を立ちあげ、同年9月1日から9月22日まで、千里公民館で「千里ニュータウン展@せんちゅう」を開いた(写真4, 5)^[2]。

千里ニュータウンの 暮らしの思い出

絵葉書作りから始まった「千里グッズの会」は、千里ニュータウンの再開発と歴史に対する関心の芽生えという動きと関わりながら、次第に「千里ニュータウンの歴史や暮らしの物語を伝えるアーカイブ」(太田, 2015)の領域へと、活動の幅を広げることになる。

「千里グッズの会」は、2011年度から豊中市との協働事業^[3]「千里

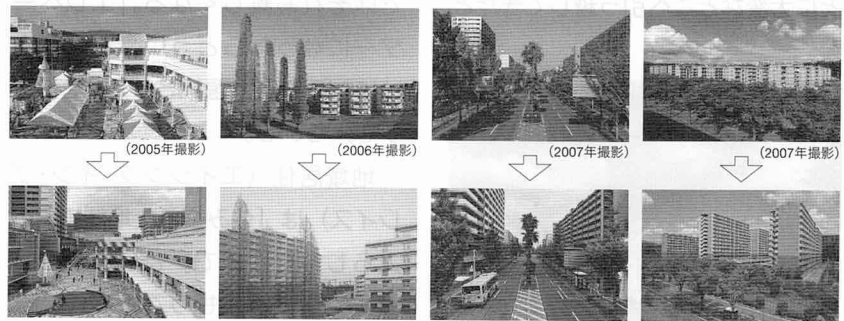


図2 絵葉書が記録する風景の変化(上下の写真は同じ位置から撮影)



写真3 「ひがしまち街角広場」での絵葉書の販売(写真右)



写真4 千里ニュータウン展@せんちゅう
①(千里公民館)



写真5 千里ニュータウン展@せんちゅう
②(再開発中の仮設通路)

ニュータウンの地域情報の『蓄積・編集・発信』システム開発事業』をスタートさせた。「千里グッツの会」の提案が採択された理由の1つは、「地域の歴史や生活に関わる情報を新しい住民も共有できたり、地域にある歴史的な資料の収集や情報を記録したりする取り組みは、地域への関心や愛着を育むことにつながる」と判断されたからである^[4]。

協働事業で取り組んだ活動の1つが暮らしの思い出のインタビューであり、はじめに紹介した府営新千里東住宅の暮らしの思い出は、この時に伺った話である。インタビューで伺った話は、収集した昔の写真や地域新聞などの資料とともに、イベント会場での展示やウェブサイトにより共有を試みてきた。

「千里グッツの会」から
「ディスカバー千里」へ

約10年にわたる「千里グッツの会」の活動を通して、千里ニュータウンは日本で最初の大規模ニュータウンとして先進的な理念のもとに計画された街であること、そこには半世紀にわたる暮らしの歴史の蓄積があることが浮かびあがってきた。近年の千里ニュータウンは、集合住宅の建替えにより人口が増加している。人口減少に直面するニュータウンが多い中では、恵まれた状況にあるとも言えるが、計画の理念や暮らしの歴史が共有されていないという課題も浮かびあがってきた。

こうした課題に、住民と専門家、研究者が協働して取り組んでいく必要があると考え、2012年9月より「ディスカバー千里」(正式名称:千里ニュータウン研究・情報センター)としての活動をスタートさせた^[5]。

現在、「ディスカバー千里」に中心的に関わっているのは、「千里グッツの会」に参加していたメンバー、豊中

表1 「ディスカバー千里」の歩み

(*「千里グッツの会」の時期から取り組んでいた活動、豊中市との協働事業として取り組んでいた活動も含まれる。)

年	月	日	出来事
2002	7	26	「千里グッツの会」が「ひがしまち街角広場」で最初のミーティングを開く
2003	3	1	「ひがしまち街角広場」で絵葉書の販売を始める
2005	9	1	「ひがしまち街角広場」の歩みを記録した冊子「街角広場アーカイブ'05」発行
2006	9	1~22	千里公民館(旧千里文化センター)で「千里ニュータウン展@せんちゅう」開催
2007	12	4	「ひがしまち街角広場」の歩みを記録した冊子「街角広場アーカイブ'07」発行
2011	4	1	豊中市との協働事業「千里ニュータウンの地域情報の「蓄積・編集・発信」システム開発事業」開始(～2015年3月31日)
2011	10	10	「ひがしまち街角広場」10周年記念行事で、「ひがしまち街角広場」の歩みを紹介
2011	11	20	東丘ダイエーズクラブ主催の「いにしえ街歩き東町昔遊びツアー」に協力。新千里東町を紹介する「大きな本」を制作(2012年11月18日「いにしえ街歩き 東町昔遊びツアー 第二弾」開催)
2012	7	25	「千里グッツの会+大阪大学建築・都市計画論領域」の「大きな本」プロジェクトが大阪府の「おおさかカンヴァス2012」の作品に採択
2012	9	15	ディスカバー千里(正式名称:千里ニュータウン研究・情報センター)としての活動をスタート
2012	10	7	「ひがしまち街角広場」11周年記念行事で、「大きな本」を使ったワークショップ開催
2012	10	26	「おおさかカンヴァス2012」のプロジェクトとして、「大きな本」による新千里東町ツアー開催(11月10日にも開催)
2014	3	2	千里文化センター・コラボでパネルディスカッション「3世代で語る千里ニュータウン」開催
2015	3	31	メンバーが編集に協力した千里ニュータウンの観光冊子『ぶらり千里～魅力発見ガイドブック～』(豊中市市民協働部千里地域連携センター編)刊行
2015	6	5	東丘小学校創立50周年記念式典にて、PTAとのコラボレーションで作成した創立50周年記念絵葉書を記念品として配布
2015	11	5	第八中学校の校内に「大きな本」を展示(～12月5日)
2015	12	16	北丘小学校内の「畑のある交流サロン」で、「大きな本」を用いて新千里北町の暮らし・思い出をインタビュー
2016	10	7	北丘小学校の「出前授業」で、子どもたちに車止めを紹介
2016	10	29	UR新千里東町団地にて「団地パンまつり&まち歩き」開催(UR都市機構、千里文化センター・コラボ、ディスカバー千里の共催)
2017	1	19	北町人權講座で「北町に込められた願い～車止めから50年を振り返る～」を講演
2017	3	9	第八中学校の「八中の中庭を蘇らせよう!プロジェクト」をコーディネート(～4月1日)
2017	4	23	「ひがしまち街角広場」主催の「春の竹林清掃&地域交流会」に協力
2017	11	25	第1回新千里北町 車止め街歩きツアー開催(以降、定期的に開催)
2018	2	8~10	千里文化センター・コラボの「コラボ2坪マルシェ」に出店
2018	2	21	「北町車止めペイント祭り」の子どもミーティング開催
2018	3	10	新千里北町地域自治協議会主催の「北町車止めペイント祭り」の洗浄・下塗りに協力
2018	3	25	新千里北町地域自治協議会主催の「北町車止めペイント祭り」の上塗りに協力
2018	6	6	新千里東町近隣センターの「あいあい食堂」(運営:大阪府社会福祉事業団)で千里ニュータウンを紹介するミニ講座「おもしろ千里」開催(2018年12月までに6回開催)
2019	1	12	第1回目の「街角広場スキマチャレンジ」開催(以降、定期的に開催)

市千里文化センター・コラボで観光冊子『ぶらり千里～魅力発見ガイドブック～』の編集やまち歩きを続けてきた市民実行委員会広報プロジェクトの有志、近畿大学建築計画研究室の学生である。

3 ディスカバー千里の活動

「ディスカバー千里」は、調査、思い出のインタビュー、絵葉書や冊子などメディアの制作・販売、まち歩き、

ワークショップ、講演会など様々な活動を行ってきた(表1)。ここではその代表的な活動を紹介したい。

千里ニュータウンの絵葉書

「ディスカバー千里」は、「千里グッツの会」が設立当初から取り組んできた絵葉書プロジェクトを継続している。メンバーが撮影した写真や調査結果を素材として絵葉書を作ることから始まった活動だが、近年では

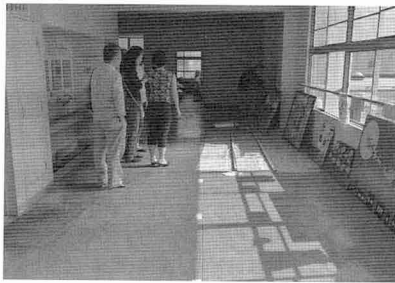


写真6 PTAとのコラボレーションによる創立50周年記念絵葉書作り



写真7 府営新千里東住宅の写真の人気投票(撮影:鈴木毅)



写真8 宿泊カレーパーティ in 東丘



写真9 「東丘ダディーズクラブ」メンバーにビー弾を教わる子どもたち(撮影:鈴木毅)



写真10 「大きな本」で子どもたちに地域の歴史を紹介(撮影:鈴木毅)



写真11 「大きな本」によるツアー



写真12 「大きな本」によるツアーでは簡易型ユニットバスが残されていた住戸を開放し、住民の女性から使い方や思い出を伺った

地域の人々からの依頼を受けた絵葉書も作るようになっていく。

2015年、新千里東町の東丘小学校が創立50周年を迎えた。PTA特別部会からの絵葉書を創立50周年の記念品にできないかという依頼を受け、PTA特別部会とのコラボレーションにより創立50周年記念絵葉書を制作した(写真6)。最近の企画は、建替えが進む府営新千里東住宅の絵葉書作りである。住民から建替え前の写真を絵葉書にして欲しいという依頼を受けたもので、イベント会場で絵葉書の候補となる写真の人気投票も行った(写真7)。

絵葉書を作り始めて16年以上にな

るが、これまで絵葉書は千里ニュータウンの住民が近況報告するため、あるいは、住民や元住民が自らの思い出にするためなどの目的で購入されてきた。「ディスカバー千里」では千里ニュータウンの絵葉書を「地域住民の日常的なツールとして、千里ニュータウンの情報を共有し、アイデンティティを確認できる仕組みとして有効なグッズ」(鈴木ほか、2013)と捉えている。

いにしえ街歩き 東町昔遊びツアー／大きな本

「千里グッズの会」と豊中市との協働事業は、「いにしえ街歩き東町昔遊びツアー」と「大きな本」の制作という、当初考えていなかった活動を生むことになった。

協働事業では、「東丘ダディーズクラブ」のメンバーに子どもの頃の遊びについてインタビューを行った。「東丘ダディーズクラブ」は、東丘小学校に通う子どもを持つ父親たちの集まりとして2001年に設立。バーベキューや、子どもたちと一緒に小学校に宿泊する「宿泊カレーパー

ティ in 東丘」(写真8)、地域の夏祭りへの参加など、多彩な活動を行っている。

インタビューを進める中で、今の子どもにも昔の遊びを体験して欲しいと話が盛り上がり、2011年11月20日「東丘ダディーズクラブ」の主催で、「いにしえ街歩き東町昔遊びツアー」が行われることになった。ツアーでは、子どもに扮した「東丘ダディーズクラブ」のメンバーが、ビー弾や缶蹴りなど昔の遊びを紹介したり、階段室から忘れ物を投げ渡すといった昔見られたシーンを再現したりした(写真9)。

「いにしえ街歩き東町昔遊びツアー」のために大阪大学建築・都市計画論領域のメンバーが制作したのが「大きな本」である。幅1,260mm、高さ1,800mmのページに、新千里東町の地図や昔の写真、インタビューで伺ったエピソードなどを掲載。ツアーのいくつかのポイントで「大きな本」を使って地域のことを子どもたちに紹介した(写真10)。

2012年、「千里グッズの会+大阪大学建築・都市計画論領域」による



写真13 千里文化センター・コラボでの「大きな本」の展示



写真14 「大きな本」で昔の写真を眺める人



写真15 動物型の車止め



写真16 幾何学型の車止めを調べる「ディスカバー千里」のメンバーら



写真17 新千里北町車止め街歩きツアー



写真18 北丘小学校での「出前講座」

「大きな本」が「おおさかカンヴァス2012」^[6]の作品に選出。これを受け、千里ニュータウンの計画理念、おすすめの街歩きコース、子どもの遊び場の変化、昔の写真などを掲載した8冊の「大きな本」を新たに制作し、ツアーやワークショップを開いた（写真11, 12）。「おおさかカンヴァス2012」としての活動が終わった後も、ワークショップやイベント会場での展示などのために「大きな本」を活用してきた（写真13, 14）。

車止め調査／北町みんなでペイント祭り

新千里北町には戸建て住宅地を中心に、リス、キリン、ウマなどの動物型（写真15）、○▽□の孔のある幾何学型（写真16）のユニークな車止めが50以上ある。これほど多数の車止めがあるのは、千里ニュータウンの中でも新千里北町だけである。

「ディスカバー千里」は、近畿大学建築計画研究室と協働して車止めの調査を行った。調査からは、これまで住民にも専門家や研究者にも注目

されてこなかった車止めについて、次のように多くのことが明らかになった。

- ・車止めは、日本で初めて新千里北町に導入された歩車分離の仕組みと密接に関わっている^[7]。
- ・小学校や公園付近には動物型が多い、下りの歩道の入口には▽の孔のある車止めが配置されているなど、車止めの配置には法則がある。
- ・動物型の車止めは公園遊具（プレイ・スカルプチャー）を転用したもののだが、幾何学型の車止めは新千里北町のためにオリジナルに制作されたものである。
- ・車止めは待ち合わせ場所になったり、ゾウの鼻やキリンの首が子どもの滑り台になったりと、車止め以外の役割も担ってきた。

このように多くのことが明らかになった反面、記録が残されておらず車止めの設置を誰がどのような経緯で決定したかが特定できなくなっていること、水道管工事などの際に撤去されたり、移設されたりした車止めがあることも明らかになった。

調査で明らかになった最も重要な

ことは、一見するとどの住区も同じように見える千里ニュータウンだが、それぞれの住区には個性があるということである。新千里北町の個性は先駆的な歩車分離の仕組みと、それに密接に結びついた車止めに現れている。「ディスカバー千里」は車止めの価値を共有したいと考え、車止めの絵葉書や冊子（武部ほか、2017）を作ったり、「新千里北町車止め街歩きツアー」を定期的に行ったりしてきた（写真17）。北丘小学校の「出前講座」（写真18）や、北町人権講座などの機会には、直接、地域の人々に車止めのことを伝えてきた。

「ディスカバー千里」の活動は、地域の人々が車止めと、その背景にある先駆的な歩車分離の仕組みの価値を発見するきっかけになった。2018年3月、新千里北町地域自治協議会の主催で「北町車止めペイント祭り」が開かれた。設置から年月が経過しペンキが剥がれかけている車止めのペンキを塗り直し、綺麗にする行事である。

「ディスカバー千里」は、「北町車止めペイント祭り」にコーディネー

ターとして協力した。ペンキ塗替えに先立つ2018年2月21日に開かれた「子どもミーティング」では、子どもたちに車止めの説明、車止めにまつわる思い出のインタビュー、ペンキの塗り方の説明などを行なった。

ペンキの塗替えは、「塗装でできる社会貢献」をテーマに活動する「闘魂ペインターズ」というボランティア団体の協力も受けて行われ、子ども70～80人を含めた約150人の住民が参加した(写真19)。

街角広場スキマチャレンジ

「ディスカバー千里」は、会議の場所として、また絵葉書の販売場所として「ひがしまち街角広場」を利用してきたが、同時に「ひがしまち街角広場」の歩みをまとめた冊子の発行、周年記念行事での歩みを振り返るワークショップの開催などにより(写真20)、「ひがしまち街角広場」のサポートも行ってきた。

「ディスカバー千里」が最近スタートさせたのが、「街角広場スキマチャレンジ」である。現在、新千里東町の近隣センターは移転・建替えの計画が進められており、空き店舗を活用している「ひがしまち街角広場」の運営は大きな岐路に立たされている(田中, 2019)。「街角広場スキマチャレンジ」は、「ひがしまち街角広場」が築いてきたものを近隣セン

ターの移転・建替え後に継承すること、移転・建替え後の近隣センターに必要な場所を考えることを目的とするもので、「ひがしまち街角広場」の運営が終了する16時以降を、時間的・空間的な隙間(スキマ)と見立て、地域にあったらいいこと、地域でやってみたいことを試すという趣旨の活動である。

2017年10月から、「ひがしまち街角広場」のすぐ隣の酒屋では、夕方立ち飲みコーナーが開かれ、若い世代も集まる場所になっている。「街角広場スキマチャレンジ」は立ち飲みコーナーと連携することで、若い世代に立ち寄りてもらおうとともに、飲食を共にしながら地域にあったらいいこと、地域でやってみたいことの気軽なアイデア交換の機会にすることも狙いとしている。

2019年1月12日(土)に第1回目の、2月23日(土)に第2回目の「街角広場スキマチャレンジ」を開催し、若い世代の住民に対して「ひがしまち街角広場」の歩みや地域の歴史を紹介した(写真21)。若い世代と関わりがもてた点で大きな意義があったが、「ひがしまち街角広場」に初めて入ったと話す人もおり、「ひがしまち街角広場」を若い世代に伝える必要があるという課題も浮かびあがってきた。「ディスカバー千里」では、今後も定期的に「街角広場スキマチャレンジ」の開催を予定している。

4 環境への能動的な関わり

はじめに触れたように、地域に住み慣れるとは、人と環境との関係の変化として実現される状態であり、「ディスカバー千里」は人が環境との関係を築いていく上で次の2つの手がかりになっていると考えることができる。

暮らしの継承によるアイデンティティの確認

「ディスカバー千里」の活動の特徴の1つは、暮らしの歴史への注目である。「住めば都」という表現があるように、人はどのような環境にでも住み慣れることができるのかもしれない。実際、半世紀前に人工的な街として開発された千里ニュータウンに入居した人々は、時間をかけてその環境に住み慣れてきたのである。「ディスカバー千里」はその暮らしを歴史として収集し、共有してきた。人はどのような環境にでも住み慣れることができる。そうだとすると、例えば中層の階段室型の住棟から高層の廊下型の住棟への建替えなど、近年の再開発に伴う環境の大きな変化は居住継続を脅かすものである。集合住宅の建替えはやむを得ないことだとしても、人々がそれまでの暮らしを忘れたり、それまでの暮らしが否定されたと感じたりすることな



写真19 北町車止めペイント祭り (撮影:太田博一)

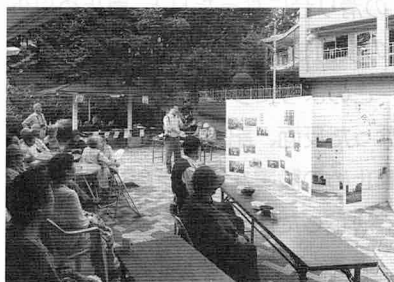


写真20 「ひがしまち街角広場」の歩みを振り返り、これからの運営について意見交換するためのワークショップ



写真21 街角広場スキマチャレンジ

く暮らし続けることができなければならぬ。ここで重要になるのが、ストーリーとしてのアイデンティティの語り直しのプロセス^[8]、変化していく環境との関係の再構築という主体的な関与である^[9]。それまでの暮らしが歴史として残されていること、参照できる状態になっていることは、この作業の手がかりとなる。「ディスカバー千里」は、ささやかだがこの部分のサポートを行うものである。

当事者としての 地域への働きかけ

「ディスカバー千里」の活動のうち1つ特徴は、昔の遊びのインタビューがきっかけとなり「東丘グライダーズクラブ」による「いにしえ街歩き東町昔遊びツアー」が行われ、子どもたちに昔の遊びが伝えられたり、車止め調査がきっかけとなり新千里北町地域自治協議会による「北町車止めペイント祭り」が行われ、車止めのペンキが塗替えられたりしたように、住民による地域への働きかけを生み出していることである。地域とは、人々に何らかの恩恵を一方的にもたらすものではなく、人々もその地域自体を作りあげる当事者の一員である(田中, 2018)。「ディスカバー千里」の活動は、人々が当事者として積極的に地域を変えていくきっかけになってきたと言える。

繰り返し述べるように、地域に住み慣れるとは、人と環境との関係の変化として実現される状態である。ただし、これは人が環境に受動的に適応することだけを意味するのではなく、上にあげたように環境に能動的に関わっていくという側面がある。

ここでポイントになるのは、「ディスカバー千里」が地域の具体的な場

所や物、風景、暮らしの思い出、つまり、地域の人々にとって身近なものに焦点をあてた活動になっていることである。人は身近なものの価値を当たり前ものとして見過ごしてしまうことがある。「ディスカバー千里」は、身近なものの価値の発見を通して、人々の環境への能動的な関わりを生む手がかりを生み出している。

謝辞

本稿の内容は「千里グズの会」、「ディスカバー千里」のメンバーの方々と活動がベースになっています。また、本稿の執筆にあたっては「ディスカバー千里」共同代表の太田博一氏から貴重なご意見をいただきました。ここに感謝の意を表します。

〈注・参考文献〉

- ・太田博一 (2015)「豊中市千里地域の魅力」・『TOYONAKAビジョン 22』Vol.18
- ・太田博一 (2018)「千里ニュータウンの市民活動の動きとコミュニティ再生の展開」・『都市住宅学』102号
- ・大原一興 (1997)「高齢者居住施設におけるパーソナライゼーション」・日本建築学会編『人間-環境系のデザイン』彰国社
- ・小松莉果ほか (2012)「千里ニュータウン・新千里東町における子どもの遊び場と行動パターンに関する研究-建替え後の実態と世代間比較-」・『日本建築学会大会学術講演梗概集』
- ・下林信夫ほか (2014)「人と都市の媒介物のデザインに関する研究-「大きな本」を用いた実践を通して-」・『日本建築学会近畿支部研究報告集(計画系)』
- ・鈴木毅ほか (2013)「千里ニュータウンのための地域絵葉書の開発」・『日本建築学会技術報告集』Vol.19 No.41
- ・鈴木毅 (2017)「千里からニュータウンを考える-「当事者の時代」における計画された町の成熟に向けて-」・『季刊民族学』161号
- ・武部俊寛ほか (2017)『新千里北町くるまどめ』千里ニュータウン研究・情報センター
- ・田中康裕 (2013)「「当たり前」の継承-千里ニュータウンにおけるアーカイブ・プロジェクトの試み-」・『住宅』日本住宅協会 Vol.62
- ・田中康裕 (2018)「ニュータウンの空き店舗に開かれた施設でない場所:ひがしまち街角広場(場所から考える高齢者の地域居住 第1回)」・高齢者住宅財団『財団ニュース』Vol.143
- ・田中康裕 (2019)「「ひがしまち街角広場」が作り変える地域(場所から考える高齢者の地域居住 第2回)」・高齢者住宅財団『財団ニュース』Vol.144
- ・豊中市市民協働部千里地域連携センター編 (2015)『ぶらり千里~魅力発見ガイドブック~』豊中市
- ・松岡洋子 (2011)『エイジング・イン・プレイス(地域居住)と高齢者住宅:日本とデンマークの実証的比較研究』新評論
- ・鷺田清一 (2012)『語りきれないこと』角川学芸出版
- ・ディスカバー千里(千里ニュータウン研究・情報センター)
https://discover-senri.com/
・ニュータウン・スケッチ
https://newtown-sketch.com

[1] 府営新千里東住宅の暮らしの思い出は「ディスカバー千里」のウェブサイト「府営新千里東住宅の日々の暮らし」、「府営新千

「里東住宅の地域活動」のページで公開している。

- [2] これ以降、千里ニュータウンの歴史に焦点をあてた展示会が定期的に開かれる。吹田市立博物館では2012年10～11月に千里ニュータウンまち開き50年事業の関連イベントとして、秋季特別展「ニュータウン半世紀展－千里発・DREAM－」が、2018年6～7月にパルテノン多摩歴史ミュージアムとの連携展示として、企画展「ニュータウン誕生－千里&多摩ニュータウンに見る都市計画と人々－」が開かれた。また、2012年9月には「千里ニュータウンのまちづくりの歴史および住民の生活文化に係る資料を展示し、地域情報を発信」する千里ニュータウン情報館がオープンした。
- [3] 正式名称は「協働事業市民提案制度」。「市民公益活動団体が、地域の課題を解決するために、市と一緒に取り組むことでより効果が高まる事業を、市に提案する制度」で、「提案した団体と市は、目的や手法について協議して企画書を作成し、協働で事業を実施」する。豊中市「協働事業市民提案制度」のページより。
<https://www.city.toyonaka.osaka.jp/machi/npo/katudo/kyodojigyo/index.html>
- [4] 協働事業市民提案の協議結果の資料より。
- [5] 「ディスカバー千里」は、2011年度からの豊中市との協働事業の通称として使い始めたが、その後は「千里ニュータウン研究・情報センター」の通称として用いている。
- [6] 「おおさかカンヴァス推進事業」とは、2010年（平成22年）より

大阪府が行っている文化事業。大阪のまち全体をアーティストの発表の場として「カンヴァス」に見立て、大阪の新たな都市魅力を創造・発信しようとするもの。

- [7] 歩車分離とは、歩行者の通る道と車の通る道の分離を意味する。これを実現するため、新千里北町では住区を巡る歩行者専用道路と、戸建て住宅地のループ型道路という先駆的な仕組みが導入された。
- [8] 鷺田（2012）は「人生というのは、ストーリーとしてのアイデンティティをじぶんに向けてたえず語りつづけ、語りなおしていくプロセスだと言える」と指摘している。
- [9] 大原（1997）は「生活拠点移動」における「主体的に関与すること」の重要性を指摘している。「生活拠点移動の手続きにおいて考慮すべき一般的な留意点としては、急激・受動的・強制的な移動はストレス要因となりやすいという点であり」、新たな環境への「適応をよくするためには、生活拠点移動における手続きとして、予測し「参加」することが重要である。すなわち、仮に受動的な移動であってもそれに主体的に関与すること、そしてその移動の時期や方法などを自分の意思で納得し管理できることが望ましい」と指摘している。

プロフィール



田中康裕
(たなか・やすひろ)

Ibasho Japan 代表
千里ニュータウン研究・情報センター事務局長

2007年、大阪大学大学院工学研究科建築工学専攻博士後期課程修了、博士（工学）。大阪大学大学院特任研究員、清水建設技術研究所研究員を経て、2013年より若手県において「居場所ハウス」の運営・調査に携わる。2014年より米国ワシントンDCの非営利法人・Ibashoがフィリピン、ネパールで進めるプロジェクトのサポートを行う。2015年よりIbasho Japan副理事長、2018年よりIbasho Japan代表。大阪大学大学院在籍時から大阪府の千里ニュータウンにおいてまちの居場所、アーカイブ作りに関する研究・実践を続けており、2012年より千里ニュータウン研究・情報センター事務局長。

主な共著に『環境とデザイン（シリーズ〈人間と建築〉3）』（朝倉書店、2008年）、『まちの居場所』（東洋書店、2010年）。ウェブサイトは<https://newtown-sketch.com>。

高齢者の地域居住の推進をめざして

エイジングイン

Vol.145
2019 Spring

プレイス

特集
住宅セーフティネット制度
～ 制度改正から1年を振り返る～

- ◆ 場所から考える高齢者の地域居住
- ◆ 地域居住における高齢者支援の現状と課題
- ◆ 海外の高齢者住宅
- ◆ INFORMATION

国土交通省 / 大阪府 / 熊本市社会福祉協議会
ビレッジハウス・マネジメント株式会社
一般社団法人そーしゃる・おふいす



一般財団法人 高齢者住宅財団